

NIHONJIN NO WASUREMONO  
**日本人の忘れもの**  
 第2部 忘れもの 39  
 志 華 森 清 範 清水 寺 貞 主

**日本文化**

日本美術・文化に携わるようになって、早10年が経過した。そのきっかけは、ささいな、いや、今思えばとても大きな一言だった。

まだ学習院大に在学中の19歳の時、英国のオックスフォード大に1年間の短期留学をした。当時の私はスコットランド史を専攻していたが、中国美術(考古学)専門の学長先生の日本美術に関する授業を受けていた。

2回目の授業の時だったか、先生から「浮世絵とはそもそもどのように見る(鑑賞する)ものなのか」という質問を受けた。現在の私であれば、「今は美術館や博物館で見るようになっていくが、当時は現代という雑誌のようなもの。切り抜きのような感覚で壁に貼ったこともあったかもしれないが、どちらかといえば、普段はしまっていて、折々に取り出して見るものだ」とでも答えたであろうか。しかし、それまでそんなことを考えてみたことがなかった当時の私は、その問いに上手く答えることができなかった。

文化は生活の中に息づいてこそ文化といえる



昔ながらの手法で染められた和紙で作った、神前に供えられる造花。



寛仁親王家長女 杉子さま

現代の生活の中に取り入れ、生かしていかなければ、日本文化は次々と過去の遺物になってしまおう。

この質問をきっかけに、私は日本人と西洋人の日本美術を見る視点の違いに興味を持ち、西洋人が初めて日本美術に出合った際、それをどのように見て、理解したかをテーマに博士論文を執筆することになった。でも、今改めてその質問を思うと、別のことに気が付かされた。浮世絵の役割が、作られていた江戸時代と現代とは別物になってしまっているというのである。

記憶を大切にすることが、日本文化を大切にすること

心遊舎は、日本の未来を担う子どもたちに本物の日本文化に触れてもらうことを目的に昨年4月に発足した。かつては多くの人々が集い、文化の発信拠点であった神社や寺も、今では冠婚葬祭や観光でしか行かないような非日常の場になつてしまっている。その神社や寺を、子どもたちがもつと気軽に集まり、共同体で育見ができる場所に戻すというのが心遊舎の目的の一つ。目指すところは、いわゆる現代版の「寺子屋」である。



心遊舎提供

その1つ目のプロジェクトが石清水八幡宮の御花神饌ワークショップである。毎年9月15日に行われる勅祭、石清水祭。このお祭りには、四季を表した12台の造花が、神前に供えられる。植物染の和紙で作られるこの造花は、神様のお心を表し、お慰めするための他の神社ではほとんど例を見ない特殊な神饌。もとは皇室からの特別なお供え物だったそう。それを氏子さんたちが作るようになっていったが、

戦後、日本人は物の豊かさと引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

●杉子女王(あきこさま) 1981年生まれ、寛仁さまの長女。2004年から10年まで英国オックスフォード大マートン・コレッジに留学。博士号取得。現在、慈照寺研究道場勤務。とともに、立命館大衣笠総合研究機構特別招聘教授や法政大国際日本学研究所客員研究員を務める。また12年4月、子どもたちに日本文化を伝えるため、発起人の代表として「心遊舎」を創設。http://shiyusha.jp/

あり、実際に使われていたものである。でも、それがガラスケースの中に入り、「鑑賞する」ものになってしまったことで、急激に生活の中から離れてしまった気がする。庶民の娯楽であったはずの歌舞伎も、ちよっとおしやれをしていかなければいけないような、高貴な伝統芸能になってしまった。もちろんそれが悪いと言っているわけではなく、いけれど、もう少し日本文化は気軽に楽しめるものだと思うのである。

文化というのは、生活の中に息づいてこそ文化といえる私は思う。現代社会の生活の中に取り入れ、生かしていかなければ、日本文化は次々と過去の遺物になってしまおう。それを防ぐために、今私たちが何ができるだろうか。その答えの一つとして生まれたのが「心遊舎」という団体である。

それが立ち行かなくなり、近年では京都の染屋である染司よしおかが一手に引き受けて調製しておられる。これを元の形に戻したいと考え、行ったのが、このワークショップである。

御花神饌はもちろん子どもたちの日常にはないものだ。でも、これを毎年継続していくことで、蟬の声を聴くと「そろそろ御花神饌を作る時期になったな」と思ってくれる子どもが増えてくれたらいいなと思うのである。

きょうの季節せ (三)

笹折て 白魚のたえだえ 青し



大きさは芭蕉の詠んだ「明ぼのや白魚白きこと一寸、3・03センチメートルでおよそ知れようが、夏目漱石の「ふるひ寄せて白魚崩れんばかりなり」の句を目にする、いかにもその姿態は哀れを誘う。才磨は加えて白魚の透明感を捉え、入れものに敷いた笹の葉の青と相俟って、色の対比の美しさを感じて繊細である。

吉岡宏恵 (京都府京丹後市/68歳)

「きょうの心伝て」

着物の良さ、伝える幸せ

「きょうの心伝て」募集

うちのかばんは “砲”と書きます。

帆布でつくるかばんだから、  
 砲ではなく、“砲”。

辞書には載ってないけれど、  
 “かばん”と読んでください。

かばんも手づくり、漢字も手づくり。

帆布と手づくりにこだわる

一澤信三郎帆布の“砲”です。

帆布 一澤信三郎帆布  
 京都市東山区東大路通古門前北  
 ☎075-541-0436(代)  
 www.ichizawa.co.jp